

「寄り合い所帯」意見割れる

民主党は1996年に前身政党ができて以来、自民党から旧民社党、旧社会党まで幅広い政党的出身者が「自民党政治の打倒」を旗印に集まってきた。このため、安全保障や憲法など基本政策が定まらない「寄り合い所帯」と呼ばれた。いまは98年の結党後に政界入りした国会議員が多くを占めており、党の綱領もつくったが、なお路線や政策を巡る違いが露呈することは少なくない。

岡田克也代表が2年目を迎えた現執行部は夏の参院選をにらみ安保関連法廃止に力点を置く。枝野幸男幹事長らリベラル系に近い勢力の存在感が大きい。同勢力は野党再編で解党による新党や党名変更を慎重。保守派は安保で対案路線、再編は新党論が目立つ。

再編を巡る党内意見は複雑だ。中間派の大曲章宏副代表らの「素交会」は新党を含む結集路線に傾く。一方で保守派でも、野田佳彦前首相率いる「花斉会」などには新党案や維新の党との合流そのものに否定的な声がある。

細野氏 新党立ち上げを 長島氏 共産と協力反対

野党再編

――夏の参院選をにらみ、野党再編の入り口となる維新の党との合流構想をどう考えるか。

細野氏「新党をきちんとつくり結集した方がいい。安保の旗にはできれば現実主義を入れたい。共産党は別だができるだけ幅広くまとめるのが望ましい」

前原氏「いったん解党した方がいい。吸収合併は選挙目当てと捉えられかねない。自公政権にどう対峙するかという見せ方が大事だ。ほかの会派や無所属も入り大きな塊になるのが望ましい。民主党が分裂したらだめで、参院選前に新党を立ち上げるのが大事だ」

長島氏「今の民主党が膨らんでいき、そこにもとも

と民主党だった人が入ってくる、というのは国民の評価に値しないと思う」

――おおさか維新の会は野党再編のパートナーになり得るか。

長島氏「共産党と連携するより、おおさか維新を含む野党と地方分権の徹底で憲法改正を共同提案する方がまともな方向性だと思う。地方分権は民主党の1丁目1番地で野党再編の大きなテーマだ。おおさか維新は改革政変を志向している。政権の側に僕らの方が追いやる必要はない」

前原氏「参院選までは無理だ。是々非々と彼らも言っている。安倍政権が下り坂になってきた場合にスタンスは変わってくると思う。将来的なパートナーという視野で考える」

細野氏「短期的には難しい。参院選は野党側が瀬戸

際で残れるかどうかの選挙だ。衆参同日選の可能性もある。ここで野党側が瓦解すれば、政権交代という仕組み自体が一時的に消滅する。今年はそれを守る本当に重要な年だ」

――共産党との選挙協力にはやはり反対か。

細野氏「岡田克也代表も共産党とは『選挙協力』の言葉を使っていない。やっぱり目指す社会像、国家像が違うわけだから」

長島氏「全くあり得ない」

――参院選前に新党が結党される見込みは。

前原氏「最後は岡田さんの決断だが、現状をどう打破するかという問題意識を持っていると思う。信頼して政策理念が一致した野党の大きな塊をつくるためのサポートをしていく」

細野氏「同じ考えだ。危機感を皆が共有できているかにかかっている」

長島氏「今の執行部が新党をつくる可能性は極めて低いと思っている。信じたけれど、相応に突き上げないと……」

長島氏「ど真ん中」行く

前原氏 ガバナンス課題

党内運営

――党内は寄り合い所帯で政策のとりまとめが難しいと言われ続けてきた。

長島氏「安倍首相は右にぐっと寄っており、ど真ん中のフィールドがガラ空きだ。民主党は国民のサイレントマジョリティーが許容できる議論をすべきなのに、左の方に急カーブを切つてわざわざ真ん中のフィールドを逃している」

前原氏「野党は常に遠心力が働く。反省しなければいけないのは与党の時も同じ感覚でいたことで、党と

してのガバナンス（統治）をどう高めるかが課題だ。いろんな議論や発言はするが、最後はまとまっていかなければならない」

細野氏「内政では『共生』『多様性』という旗印がある。もう少し良い意味で権力に対する食欲さを持つべきだ。それぞれ言いたいことを言うだけであれば野党でもいいが、それでは政治家になった意味がない。政権に戻るんだ、という自民党の執念みたいなものは見習わないといけない。それがあれば簡単にバラバラにはならないと思う」

――離党という選択肢はないのか。

――離党という選択肢はないのか。

――離党という選択肢はないのか。

櫻田淳・東洋学園大教授（政治学）の話 日本では、とくに安全保障政策で、国際社会で一定の軍事的貢献を排除しない普通の国を志向するのが保守で、それにあらがうのがリベラルという理解が定着している。

自由、社会活力、国民統合の護持が保守政治の基本信条で、それを担保する政策に保守政治勢力が熱意を示すのは当然だ。安倍晋三

保守の肝は平衡感覚

首相の自民党はそれを平ば劇的に打ち出しているにすぎない。

一方で保守主義における内政では、社会活力の維持のために、平等よりも自由を優先する政策志向があるが、それが招く格差の拡大が国民統合を揺るがす事態についても警戒する。

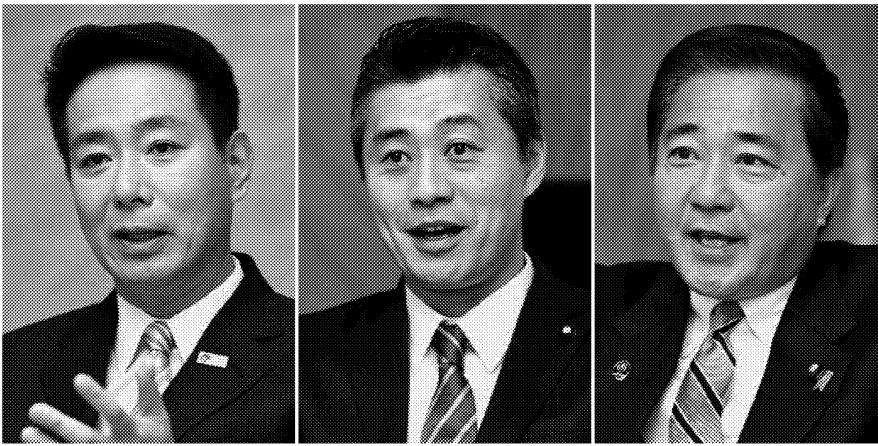
そのときどきの時代の要請に適切に応じる平衡感覚が、保守政治の肝だ。

お断り「政 その瞬間」「ログ&ツイート」は休みました。



「安倍1強」といわれる与野党情勢で、民主党が逆境から抜け出せない。対決姿勢にかじを切り政権との違いをみせる中、外交や安全保障政策で現実路線を標榜する保守派はどう考えるのか。代表格の前原誠司元代表、細野豪志政調会長、長島昭久元防衛副大臣に鼎談（ていだん）で聞いた。（飯塚遼、宮坂正太郎、永沢毅）

前原・細野・長島氏語る



まえはら・せいじ 衆院京都2区、当選8回。2005年に43歳で代表に就き対案路線を掲げたが、半年余りで辞任した。政権時代は国土交通相、外相などを歴任。京大で保守派論客の高坂正堯氏に学んだ。53歳

ほその・ごうし 衆院静岡5区、当選6回。政権時代に環境相などとして原発事故対応で知名度を上げた。15年の代表選で岡田氏に決選投票で敗れた。保守派若手も多い派閥「自誓会」を率いる。44歳

ながしま・あきひさ 衆米院東京比例、当選5回。外交問題評議会首席研究員を経て政界入り。日米外務や安保政策の専門家。知られ、政権時代は野田佳彦首相の下で首相補佐官や防衛副大臣を務めた。53歳



鼎談する（左から）長島前原、細野の各氏

民主保守派の思い

政策路線

――民主党での保守派の位置付けをどう考えるか。

前原氏「民主党はかくあるべきだと考えるとき、政府・与党と内政で違いをしっかりと示すべきだが、外交・安全保障政策はそれほど違いがなくていい。現実的な対応をベースに考える。何でも反対ではなく反対であれば対案を示す。責任政党としての矜持（きょうち）を示すのが大事だ」

――内政でどのような対立軸を示すべきか。

細野氏「安倍政権の内政は本来あるべき保守から離れている。国家先導主義で、

設備投資や賃金、携帯電話代にまで関与するという。民主党政権で打ち出した『新しい公共』は民の力を信用し、政府はそっと後押しするという考え方だ。本来のあるべき内政を打ち出してほしい」

長島氏「イデオロギーで外交や安保を語る時代は過ぎ去っている。8割は一緒でよく、ニュアンスやアプローチの2割の違いを競い合えばいい。保守二大政党の一方が制度疲労を起したとき、さっと代わられる受け皿を常に用意しておくのが大事だろう。自民党は政権保守で、我々はチャレンジャーの改革保守だ」

――憲法改正には異論がないのか。

前原氏 安保は現実的対応 細野氏 国民合意なら改憲

細野氏「20年ほど前から護憲か改憲かという時代ではなくなっている。国民的合意ができるものは改正すべきだ」

長島氏「改正すればいい。改正の条文ややり方で違いが出てくる」

前原氏「民主党はがちがちの護憲ではないので議論を積み重ねればまとまる。安倍晋三首相は野党分断の政局論で憲法改正と言っている。改憲は選挙の争点ではない。数年かけてやらないうといけない議論だ」

――安倍政権の経済政策、アベノミクスは結果も出している。

前原氏「二極化が進んでいる。ワーキングプア層や低年金受給者を救うには分

配政策だ。一方で成長戦略の一部は民主党政権でやろうとしたもので（民主党も）アンチビジネスではない。バランスが必要で、中間層がしっかりと支える社会にどう作り直していくかが目指すべき社会像だ」

細野氏「長期政権の強みを感じる。1年ごとに首相が代わった民主党政権は長期的視点の改革を準備できなかった。民主党は改革政党だったはずだが、政権を経験しやや物わかりが良くなり積極性がなくなった。子育て支援、若い人に元気に働いて消費してもらうため、人生前半の社会保障にかじを切るのが経済の屋台骨を支えるのにつながる」

長島氏「自民党はまさに『現世御利益』政党だ。野党は10年、20年先の構想から逆算し、社会保障や財政、教育制度を持続可能な形にする改革を提案する必要がある」